

「真空地帯」

(1952年 モノクロ 新星映画製作)

監督 山本薩夫

原作 野間 宏 製作 嵯峨善兵 岩崎 昶

脚本 山形雄策 撮影 前田 実 美術 川島泰造 平川透徹

音楽 団 伊玖磨 照明 伊藤一男 録音 空閑昌敏

(出演) 木村功 神田隆 三島雅夫 岡田英次 西村晃 加藤嘉

佐野浅夫 高原駿雄 野々村潔 薄田研二 金子信雄 花沢徳衛 利根はる恵

(解説)

戦争中の日本軍隊の内務班の実態を自らの体験をもとに描き、厳しく追及、批判した野間宏の『真空地帯』は、日本文学を身辺的な風俗小説から大きく前進させた文学史的作品として高く評価され、昭和27年度(1952年)毎日出版文化賞を受賞した。

一等兵として、悲惨で理不尽な軍隊生活を強いられた監督の山本薩夫は映画化に執念を燃やした。軍隊で受けた、徹底的な人間性の否定、味わった屈辱を絶対に許せなかったのだ。撮影は、戦後そのまま残っていた、千葉の佐倉連隊の建物を使って行われたが、奇しくもそこは、監督が、一兵卒として、軍隊生活を送ったところであった。

スタッフ、キャストの中にも、軍隊体験者がおり、内務班がリアリティをもって描かれており、天皇制軍隊の非人間性を鋭く暴いている。一方で、兵隊たちひとりひとりが、个性的に描かれる演出が見事である。エキストラとして、たくさんの学生たちが出演しているが、当時、東大の学生だった、山田洋次監督もラストシーンに兵隊の一人として参加している。

(物語)

木谷一等兵は、週番士官の金入れを盗んだ冤罪で、激しい拷問の末、陸軍刑務所で2年間服役し、原隊に戻ってきた。同年兵のいないここで、みんなからうさん臭く思われている木谷だが、4年兵とあって、上等兵たちも制裁できずにいた。兵隊が唯一楽しみにしている外出の日、外出できなかった木谷は、班内で唯一木谷に好意を持っている曾田に、罪に陥れられた過去を話した。内務班には、様々な人間がうごめき、初年兵いじめ、卑猥な行為、上官へのごますり横行していた。木谷が刑務所帰りであることがわかり不穏な空気が充満する。やがて、班内に、野戦行の噂が広まった。その中には、木谷も含まれていた。またも、軍隊内部の勢力争いの結果、木谷追い出しの陰謀だった。木谷は野戦行の前に、自分を監獄に送りこんだ、林中尉に決着をつけようと個室へ忍び込み、殴りつけると、雨の中、営庭へ飛び出した。あの塀を乗り越えたい！しかし、木谷を追い詰める声がせまる――。